

Title	朝鮮支那文化の研究(京城帝國大學法文學會編, 刀江書院發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.148(656)- 153(661)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0148">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0148</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「清朝開國期の史料」に於て、博士は支那を統一した帝室の歴史としては、其の統一の全く成るまでを開國期中に包有させるのは、至當であるけれども、清朝の統一は、明朝などは、少し相違があつて、統一者は國內から起つたのでなく、域外から入り込んだのであるから、其の侵入が已に一紀元を作る價值がある。故に此にはやはり普通の入關以前を一期とする習慣に従つて、開國期即ち入關前と解し去る」といはれ、此時の史料を、(一)清朝人自身の手に成れる者、(二)明人の手に成れる者、(三)朝鮮其他の國人の手に成れる者(日本人の手によりて傳來せる史料なども此中に入る)等の三種に分たれ、此篇に於ては第一の分だけを即ち三期實錄、滿洲實錄、漢文舊檔、滿文舊檔等について述べられてゐる。

「都爾尊考」は一二の材料を提出されて、故箕内博士の説を補はれたものである。

「王亥」は王靜安の説に本づいて、夏殷人の命名、並びに其の古傳説等に關する考證を試みられたものである。

「續王亥」は靜安の「殷虛卜辭中所見先公先主考」の大意を節録し、之に對する博士の卓見を披瀝されたものである。

「大英博物館所藏太平天國史料」は、大英博物館所藏の太平天國史料及びゴルドン文牘について述べられたものである。該博物館に藏せらるる史料は貴重なるものであるが、此史料の邊録に最初從事されたのは、わが慶應大學の教授で、「史學」を創刊された故法學博士田中萃一郎先生である。先生が明治三十八年英獨に留學された時、日々大英博物館に於て逡寫された太平天國に關する史料

は、學界未發表の至寶であつたのである。内藤博士が先年大英博物館に於て逡寫された史料と、同じく稻葉君山氏の逡録された史料と、田中先生のこの史料と、都合三様の寫本を校對して完全な底本を作り、不日學界に發表されることになつたのは、學界のため寔に祝福すべきことといはなければならぬ。

「新羅眞興王巡境碑考」、「明東北疆域辨誤附奴兒干永寧寺碑記」、「高昌國の紀念に就て」、「近獲の二三史料」の中に收められた高句麗人の三墓志の如きは、博士ならては手のつけられぬものばかりである。尙ほ本書には貴重な圖版が少からず、收められてゐる。

京大の講壇を去られてから已に三年、豐饒として堂々支那學に精進する博士は寔に學界の至寶といはなければならぬ。その懇愚冥煩を顧みず、かゝる粗笨な紹介を致して余は、博士の寛恕を希ふて止まない次第である。(宮島貞亮)

### 朝鮮支那文化の研究

(京城帝國大學法文學部發行)  
刀江書院發行

本書は、京城帝國大學法文學部第二部(哲學、史學、文學部門)編纂の第一輯である。大學が既に存在する以上刊行物なり雜誌なりを通じてその業績を天下に紹介することは極めて必要である。

雜誌發刊は近時の流行であるが京城大學がその時流を追はず、内容ある膨大な論文集を發行して是に代へたのは學界にとつて悦ぶべき事柄である。今此處にそのあつめられた諸論文を讀み得た範圍に於て紹介して見る。卷頭を飾るのは、今西條博士の「湧水考」である。博士は、水誌に列・帶・洎三水のことを論ずる豫定なりし

も健康すぐれず、その一部分だけを掲載したとのことである。古代朝鮮の河川にして、その名稱の支那古籍に見ゆるもの三あるがその今日の何れに當るかについて、研究者の間に諸説紛々として今日なほ定まらない。その中冽水だけは著者の大正二年九月黏蟬の碑を發見したことにより殆ど異説がなくなつた（第一頁に同碑の發見を昭和二年九月としてゐるのは勿論誤植であらう。）一體冽水は、箕氏朝鮮時代には支那文化の中心地であつたらしく、その後燕の時に中心は今少し南方に移動したらしい。晋の郭璞は、山海經の註に冽水を滄方郡にありとしてゐるが、楊子方言の註に遼東にありとし、正確な智識を有しなかつたものゝ如くである。漢書地理志樂浪郡吞列縣の原註によると冽水が黏蟬郡で海に入りしことがわかる。また史記集解にのせる張晏の説によると樂浪朝鮮の主要な河であつたことも明白である。更に史記朝鮮傳の記事から推察すると王險城は列口からさかのぼる大河の北岸にあつたらしい。朝鮮の諸家は、冽水非大同江説を多く唱へてゐるが、日本では白鳥博士が主として大同江説を主張されてゐる。此大同江説を證明するのは次の如き事實である。列口は北支那と半島と海路交通の最も便易なる地點であつた。しかして大同江口には、後代支那山東と交通する最要衝であつた。風さへ順であれば山東半島から大同江口まで一日一夜の航程であつた。また三國地理志や東國輿地勝覽に大同江口に栗口といふ地名がある。是は列口に外ならぬ。次に王險城の位置は、涓水の南冽水の北にあらねばならぬ。漢の武帝の時是を改むるに陸軍は涓水を渡りて進み、水軍は列口から入り、前者は王險城の西北を、後者は居城の南に往て會

してゐる。しかして高句麗以來、王險城が今日の平壤であるといふ所傳がある。最後に冽水が海に入る處として、漢書地理志の原注にある黏蟬縣は、著者が大正二年九月、黏蟬長官が平山君を祠りて建てた碑を大同江々口北に接近した地方で發見したことにより、その大同江の江口北側なることが實證された。

以上述べた所に従つて冽水が今日の大同江であることに疑ひはないが、それではなぜ支那の文献で、後世是を涓水と呼んでゐるか。恐らくこれは驪道元の水經の文の誤讀及び高句麗使節の驪道元に對する虚偽な返答が、かゝる誤を生じたものであらう。そしてその誤を朝鮮人も亦襲ふやうになつた。然し高句麗人は、涓と書きながら、是を冽水本來の名稱で訓讀したらしい。即ち日本書記は、涓凍といふ記事をエホソリと呼んでゐる。エは正しく高句麗の土語であつたらしい。此「エ」は冽水の冽といふ語から移つて來たのであらう。この語は古音入聲であり、尾音はツてもルでもなかつた。この冽の字音で表示した名稱を朝鮮人や高句麗人は *hwa* に近く訛つたと思はれる。*wa* の前の *h* は消滅するか即ち「エ」に移つたのである云々。以上が、今四博士所論の大要である。博士の歴史地理的考證については、その精密な所論に敬服するがたゞその言語學的部分たとへば冽といふ語が、古音入聲であり、尾音はツてもルでもなかつたといふ、高説の如きは、今少しく例證をあげて朝鮮古代の發音について、門外漢の吾人に教示していただきたい。博士は、水の古音 *hwa* 若くは *hwa* を買や密や蔑の音を假りて表示した例があり、參考とすべきであると云つてゐられるが、水の古語が古代に終子音を有しなかつたとは斷

言出來やうか。

附論として博士は「列、樂浪の名稱」を論じ、列も樂浪も朝鮮人自身の命名なりしなるべし、朝鮮民族は名詞の初音に羅行音を有せず、奈行音に變じて使用したるなるべし、樂浪はナラの對音、列はニヨの對音にして、前者は國、後者は川を示す語を表示したるならんと推定し、しかし是は後更に考究を進めればならぬとし、附論二に「樂浪郡治の所在地に就きて」には、王險城の地大同江北にあつた樂浪郡治は後江南に移つたことを述べ、江南大同江面の土城は、あまりに狭少であり、前漢書に見ゆるごとくに、二十二萬の樂浪郡治の所在地とは思はれぬとし、これは王險城の別城であり、樂浪郡が衰微して後此處に郡治を移したらうと推定し、此點に於て關野博士の樂浪郡治江南説を排撃してゐる。

小倉進平博士の「西洋人によつて蒐集せられた早い時代の朝鮮語彙」は、その採集を三期に分ち、一六五三年オランダ船の漂流に際し、生存者ハメルの残した紀行 Martini, Montanus, Wilson, du Halde, P. Las, Heras, Adelung の諸著 Broughton, Hall の旅行記等に見ゆるものは、皆偶然的に採録されたもの、又は探險家が物好きに採集したもので最初から断片的なる點に於て性質が似かよつてゐるとなし、是を朝鮮語彙採集の第一期となし、次に Kaproth, の如き、第一期の資料を採取し、「鷄林類事」の如き數種の日鮮語彙を涉獵して、語彙の擴充をはかり、朝鮮語の存在を世界に紹介した研究者の出た時代を第二期とし、クラブロートを踏襲した Balbi, Kxlander もこれに入れてゐる。ついで Schold, Mehnst, Belcher を中心とした新たに「類合」「千字文」「倭語類

解」等の書の新資料として加へられた時代を第三期とし、是等の諸書に出た語彙を一括し、語彙表を作つて現代語と對應せしめてゐる。現代朝鮮語研究第一人者たる同博士の蘊蓄を語る好個の小篇である。

小田省吾氏「李氏朝鮮時代に於ける倭館の變遷（就中絶影島倭館に就て）」は、既に本誌一卷、四〇八頁以降に武田勝藏氏「日鮮貿易史上の三浦と和館」が發表されてゐるので興味深く讀まれた。小田氏は、日鮮通交史を調査する前提として倭館史を研究し、親しく實地踏査をしたが、その遺跡が殆ど殘存してゐらず、草梁の倭館地さへ將に湮滅に歸せんとしてゐるので、屢々釜山に滞在してその調査をなした。本篇はその結果である。最初に南鮮地方の倭館の變遷から述べ、三浦倭館（富山浦、鹽浦、齊浦）の創始は不明であるが、李朝實錄によると、第三代太宗十八年に富山浦の日本人を刷出して鹽浦と加背梁に分置した記事あり、後の二者が此時出來たとすれば當時より多く繁榮したと思はれる。齊浦と富山浦はそれ以前から倭館が設けられたのだらうと推し、通交大紀竝に「倭館始末」の説を排し、李朝初期の制度は、高麗末から承け繼いで居るものが多く、彼の高麗時代の金州倭館は、その位置（金州附近とすれば）齊浦に最も近くして或はその後身とも見られぬでもないから、恐らく倭館の如きも早くより此浦に置かれ、鹽浦、加背梁の如きは、之に倣つて設置せられたのではあるまいか、加背梁の倭館だけは設置せられざりしか、又は設置せられても早く廢止されたのだらうと云ひ、三浦倭館の位置は海東諸國記添附の南涕の三浦圖で知ることを得、然しその遺址は不幸にして存しな

い、また東國輿地勝覽には、倭使が、水路洛東江を溯り京城に趣く際接遇した小公館が、九期里、主旬淵津にあつたことを示すといひ、第二に齊浦の倭館が、中宗五年の三浦の亂以後禁止された後、特別に一つだけ復興されたことを述べ、第三には、中宗末年の蛇梁鎮の倭寇ありしものち、齊浦を閉ぢて倭館を釜山浦に移し、海賊の取締りに便せしことを説き、第四には、壬辰亂後絶影島に假に設けられし倭館について考證し、第五に講和成立後初めて出来た豆毛浦倭館のことを述べてゐる。豆毛浦は、釜山鎮と新草梁との間にあり、從來此倭館は釜山鎮と呼ばれ、これに豆毛浦の名を冠して混同を避けたのは小田氏の創意である。その船倉は、極めて不完全のものであり、日本側は、之の移轉を請ひ、延寶四年に草梁に之を移した。此倭館が、現在釜山府市街の中心部を占め、明治五年外務省の直轄に歸し、倭館としての生命を失ふまで實に二百餘年を経過したもので之が第六次草梁倭館である。この移轉問題は最初仁祖十八年(寛永十七年)對州側から、防備には不適當といふ理由から、移轉請求がなされてゐるのは理由不明で、恐らく清軍侵入に備へんためなりしか、または淹滞米督促の一方法なりしが要するに對州側の史料をしらぶる必要ありと述べてゐる。小田氏の研究は詳細を極めてゐるが、主として朝鮮側史料によつてゐる。先に朝鮮總督府の保管に歸した宗家史料を調査されて日本側からみた和館史を補足していただきたい。

高橋亨博士の「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達」は、堂堂百四十頁にわたる大篇である。朱子學が完全に朝鮮に移植され李朝に於て禮と學理の點より論争がはげしかつた。本篇はその學

理上の論争の最大なるもの、四七論争について述べてゐる。第一章に李退溪の四端(惻隱・羞惡・辭讓・是非)は理の發、七情(喜怒哀懼愛惡欲)は氣の發、理と、氣が互ひに單獨に發動して情となることを主張する説と反對論者李高峰の一切の情は理氣の合用、七情と四端とは同一情であり、七情は性の發して成す所の情の全部の總名であり、四端は七情の中から特に純善なものないつたに過ぎぬといふ説とを述べ、その論争の経緯を叙し、附するに李退溪が、日本の崎門學派に如何に影響したるかを示し、第二章に、李栗谷の李高峰側に荷擔せる四七説を説き、第三章に、此論争が朱子の學説と如何なる關係あるかを論じ、李退溪は朱子の學説に忠實であり、たゞし朱子には論理的に内容を異にする所のものを同一類の情として取扱つた不合理あり、退溪も高峰もこの論理的不徹底を襲ふたとし、第四章に李退溪の跡を襲ふ。嶺南學派(慶尙道)、第五章に栗谷の衣鉢を傳ふる畿湖學派(京畿・忠清)第六章に畿湖學派より出てながら寧ろ退溪に近き、農巖學派について述べてゐる。朝鮮史において困難とされてゐる黨争が、哲學論争の方面より光明を與へられつゝあるのは、悦ぶべきことである。

藤塚那氏の「李朝の學人と乾隆文化」は、朱子學全盛の朝鮮が、次第に清朝老證學に影響されてゆきたる徑路を述べ、使臣若しくは隨行員が乾隆時代に燕京に來りて名流碩學に接近し、文籍を購入し、半島の學界は、之により刺激をうけ、實事求是の學が擡頭したることを説いてゐる。氏がやがて發表すべき朝鮮第一の考證學者金阮堂論の序論である。

加藤常賢氏「舅姑甥稱謂考」は、帝國學士院の補助によつて研究したものの一部である。まづ甥とは何ぞやといふことより説き起し、之に(一)姉妹の子 (nephew) (二)婿 (son-in-law) (以上異代) (三)姑の子、舅の子 (father's sister's son, mother's brother's son) (四)妻の舅弟、姉妹の夫 (brother-in-law) (以上同代)の四種ありとし、甥の字が男に従ふは最初男の子のみを指稱せしめならんとし、姪も兄弟の子の女のみを指したるなるべしとし、姉妹の子の女子、兄弟の子の男子、父の姉妹の子の女子と母の兄弟の子の女子の稱謂なきことに注意し、ついで、舅姑とは何ぞやを論じ、親族關係には、(一)父の姉妹 (Aunt) 母の兄弟 (Uncle) 婚姻關係には、(二)妻の父、妻の母、(三)夫の父、夫の母 (father and mother-in-law) の三通りありとなし、何故に斯様に相違つた關係にあるものが等しく舅姑と稱呼されたであらうかと問ひ、喪服上婿或甥と舅との一致、或は婦と、姑との一致あることに注意し、第三節に舅姑と甥(異代者稱謂)姪婦の關係を論じ、舅の妻を姑、姑の夫を舅と假稱する假定を設け、四通りの舅姑あることを示し、かく四通りに一致するのは、その稱謂が、階級的親族關係 (classificatory relationship) の稱謂なるが故なりとし、この研究にはその親族組織及び婚姻制度を考察する要ありといひ、第四節に春秋時代に於ける婚姻型相を考究し、その特質として、(一)同姓不婚、(二)重婚(代々つゞけて結婚す)、(三)cross-cousinの結婚(兄弟の子と姉妹の子との結婚)、(四)ソロソロトとをあげ、第五節は此婚姻方法と甥舅姪姑の稱謂との關係を説明してゐる。即ち、クロス・カズンの婚姻に、一方的と交互的とあり、前者の場合、兄弟の女

子と姉妹の男子との婚姻に際しては、親族關係の舅姑の二通りは婚姻關係の舅姑の二通りと一致する。交互の場合には四通りの舅姑は一通りに纏まつてしまふ。そして此交互的クロス・カズンの婚姻型態に於て、甥に女を含ませず、姪に男を含ませぬ理由が解釋される。兄弟の子に於て男子の稱謂が缺如し、姉妹の子に於て女子の稱謂が缺如したのも一方的クロス・カズンの婚姻によつて解釋される。また同代者稱謂の四通りの甥も交互的クロス・カズン婚姻にあつては、元來同一人に歸してしまふ。最後に著者は甥とは母族の人にとつて同生即ち生れを同じくする男の意であり、舅姑は尊敬を表示する字であり、是等の名稱が、父系制になりきらぬ、古い家族制度より生れ出て來たらしきことを考證してゐる。近世の社會學に棊さして支那經學に一大革新をもたらせる好個の論文である。著者が、更に爾餘の問題について、その研究の結果を速かに發表されんことが望ましい。

玉井是博氏の「唐の賤民制度とその由來」は、唐の賤民を官に隸屬する賤民と、私家に隸屬する賤民との二つに分ち、その種類を説明し、次にその淵源を述べ、殷代にまで遡り、奴婢が古くより犯罪及び捕虜より生ぜしことを述べ、周漢六朝の奴婢制に觸れてゐる。興味ある研究であるが奴婢の機能その變遷については一層、内面的に深く研究する必要があると思はれる。

鳥山喜一氏の「猛安謀克と金の國勢」は、猛安謀克が、女眞民族の部落生活に端を發し、將校及び之に率ひられる軍隊を意味し、ついで行政區劃及び長官をも意味し、同時に榮譽ともなりしこと、初めは外民族にも適用され、内外の融和に實せられたが後、外族

は除外せられ、また中原にも屯田的に此集團が移住し、保護され  
じこと、結局文弱、怠慢に流れ、衰頹し、金は傭兵により國家を  
防禦せざるべからざるに至り、ついに滅亡したる経緯を詳述して  
なる。

幸島曉氏の「金聖歎の生涯とその文藝批評」は、極めて文藝的に  
この批評家の哀しき一生を叙し、讀者の涙をそそつてをる。單な  
る考證家の至り得ざる才氣走つた一篇である。

以上は「朝鮮支那文化の研究」のごく片鱗を紹介したに過ぎな  
い。建設日なほ淺くして内容充實した此論纂を生んだ京城大學文  
學部に敬意を表し、編輯者、田保橋漢氏の勞苦に感謝して筆をお  
く。(松本信廣)

## 日本經濟典籍考

(瀧本誠一著  
日本評論社版)

舊籍の出版及びその解説の學問の進歩に大なる貢獻のあること  
は言ふまでもないことである。我々の研究上の困難はこの點に存  
することが大である。特に徳川時代の書物の如きは多くは、寫本  
として傳り、又出版されたものであつても謂所珍本となつて我々  
は容易に之を手にすることが出來ず、且つその解題が十分でない  
爲に澤山の本の中よりその研究上に必要な本を選ぶことが困難  
である。若しもこの舊籍の出版及び解説が充分行はれる様になれ  
ば我々の研究上の一大困難が除去されることとなるのである。

瀧本博士はすでに日本經濟叢書正續篇を刊行して我が學界に大  
なる貢獻をなし、更らに又日本經濟大典を刊行しつゝあるのであ

る。

本書は博士がかゝる大事業をなしつゝあるかたはらなされたる  
書籍の解説であつて何れも徳川時代の政治經濟に關するものであ  
る。本書に載せられた典籍は先に編纂された日本經濟叢書正續篇  
に所載されたものを主とし、其他博士の文庫中に現在する數百  
部の書中重だつたもの數部を撰擇し解説したものであつて、明治  
初年に編著せられたものは、他日別に近代のみの部を編成さるゝ  
意向を有せらるゝので、未だ刊行されない一二のものを加へ、他  
は一切之を省かれたのである。而して本書に所載された典籍は殆  
ど全部新に刊行されつゝある日本經濟大典に收められたものであ  
る。徳川時代の著作特に經濟上に關する記事論説は、概れ種々雜  
多な問題を一書の中に論じてゐるので、内容に依つてこれを分類す  
ることは反つて混雜を來す爲に、博士は内容に依る分類法を取ら  
ず、又徳川時代の著作は、何れも祕密にされ多くは寫本で傳へら  
れ、著者の名も年代も不明のものが多い爲めに、その書目排列の  
順序は著作や出版の年代又は著者の前後に依ることも不可能であ  
る。それ故に博士は新古前後に拘らず解説をほどこしたものを排  
列されたものである。然し本書はその性質上、順序を追ふて初め  
より通讀すべきものでないからして、我々は巻首に添へてある精  
密な書名索引及び著者名索引に依つて、自分の必要とする書の内  
容を知ることが出来るのである。

而して本書に於て解説をなされてゐる典籍の數は實に三百六十  
五種、著者の數は二百二十六人に上るのであつて、之を見ても  
本書が徳川時代の政治經濟典籍の解説者としての價値を知ること